

平成 28 年度 第 2 回

宇治田原町総合教育会議議事録

宇治田原町総合教育会議議事録

招集年月日 平成29年3月17日(金)午後3時開会

招集場所 宇治田原町総合文化センター 3階 研修室1

議事日程

1. 開会

2. 町長あいさつ

3. 協議事項
 - (1) 小中一貫教育について
 - (2) 意見交換

出席委員

町長	西谷 信夫
教育長	増田 千秋
教育長職務代理者	田中 典夫
教育委員	山本 薫
教育委員	杉野 三千代

職務のため出席した者の職氏名

総務部長	久野村 観光
教育部長	黒川 剛
総務課長	清水 清
総務課庶務人事係長	中村 浩二
総務課主事	中井 春花
社会教育課課長	岩井 直子
学校教育課課長補佐	池尻 一広
学校教育課教育総務係長	難波 親夫

会議傍聴者

10名

○清水課長 皆さん、こんにちは。

それでは、定刻となりましたので、ただいまより平成28年度第2回目宇治田原町総合教育会議を開会いたします。

私は、前回に引き続き司会を務めます総務課長の清水でございます。どうぞよろしくお願いをいたします。

なお、大嶋委員につきましては、他の公務のため欠席されていることをご報告いたします。

本会議につきましては、宇治田原町審議会等の活性化指針に基づき公開としており、事前に会議開催日時を町ホームページにおいて告知の上、傍聴を希望する方に対して傍聴を認めることとしております。

傍聴者におかれましては、お手元に配付させていただいております宇治田原町審議会等傍聴要領に従い、適切な会議運営にご協力いただきますようよろしくお願いをいたします。

また、本会議につきましては、前回同様、会議録を作成し、町ホームページにて公表することを予定しております。

また、報道機関による取材等を受けた場合には、会議結果、内容等について情報を提供することとしておりますので、各位におかれましてはご了承いただきますようよろしくお願いを申し上げます。

本日の会議は、お手元にお配りしております次第に沿って進めてまいりたいと考えております。

それでは、開会に当たりまして西谷町長よりご挨拶を申し上げます。

○西谷町長 皆さん、こんにちは。

今日は小学校の卒業式、先日は中学校の卒業式ということでございました。大変厳かに卒業式らしい卒業式。子どもたちも、在校生、また卒業生につきましても、大変よい態度で臨んでくれたので、大変喜んでおるところでございます。

本日は、平成28年度第2回の総合教育会議のご案内申し上げましたところ、皆様方には、大変公私ご多用のところ、ご出席を賜りまして誠にありがとうございます。

また、平素は本町行政推進に、何かとご理解、ご協力を賜っておりますこと、そして、また教育行政に何かとご尽力いただいておりますことに、重ねてお礼を申し上げたいと思います。

さて、前回開催させていただきました総合教育会議では、小中一貫教育について大変

熱心にご協議をいただいたところでございます。

本日につきましても、引き続き小中一貫教育について協議をいただきまして、宇治田原町の教育、宇治田原町で育つ子どもたちの未来がよりよい未来になるように、具現化に向けて進むことが大変重要であろうかと考えておるところでございます。

どうか皆様には忌憚のないご意見を賜りますようお願いを申し上げ、簡単でございますけれども、開会に当たりましてのご挨拶といたします。どうぞよろしくお願いいたします。

○清水課長 ありがとうございます。

それでは、早速協議事項に入ってまいりたいと思いますが、議事の進行につきましては、宇治田原町総合教育会議運営要綱第3条の規定に基づきまして、西谷町長に進行をお願いしたいと思います。

町長、よろしくお願いをいたします。

○西谷町長 それでは、本日の協議事項につきましてはお配りしております資料のとおり、前回第1回に引き続きまして、1番目に小中一貫教育について、あと2番その他ということでございます。

それでは、小中一貫教育についていろいろとご協議をしていただいておりますので、ご説明をよろしくお願いしたいというふうに思います。

増田教育長。

○増田教育長 それでは、私どものほうから協議、施設のあり方についての方向性について検討いたしましたので、教育委員会で協議した経緯及び方向性についてご説明申し上げます。

施設のあり方につきましては、宇治田原町小中連携一貫教育のあり方検討会議のまとめにおいて、将来的には、現行の2小学校の形態を維持し続けるか、新たに核となる小学校を設ける施設一体型の小中一貫教育校の形態をとるかの選択が必要な時期が来ると思われるが、いずれにしても将来の宇治田原町を担う子どもたちを地域を挙げて育てていくという理念に違わぬ方向を打ち出す必要があると提示をされました。

その後、宇治田原町教育委員会においては、文部科学省を事務局とする学校施設のあり方に関する調査研究協力会議が発行した資料や、文部科学省が策定した公立小学校、中学校の適正規模・適正配置に関する手引きを用いた会議の開催。小中一貫教育全国サミットへ出席するなど、小中一貫教育の推進を図るべく検討を重ね、研究協議を進めてきたところでございます。

昨年12月の教育委員会定例会から、平成29年3月の定例会まで4回にわたり教育的視点から小中一貫教育関係、児童数関係、地域関係の観点から、それぞれのまとめを行い、総合的に方向性を導いたところです。

1番目には、小中一貫教育関係の視点からでございます。こちらの視点につきましては、前回2月17日の総合教育会議でご説明いたしましたので、割愛をさせていただきます。

2番目には、児童数関係の視点からでございます。今後の児童数の推移を見ますと、数年後にはほとんどの学年で1学級となり、1学級であることによる課題は大きく、公立小学校・中学校の適正規模・適正配置に関する手引きや、小・中学校の設置・運営のあり方等に関する作業部会（第11回）等の資料に記載されている学級数が少ないことによる学校運営上の課題が当てはまるという点が多いという認識が教育委員会でもなされたところでございます。

例えば、クラス替えが全部または一部でできない。組織的・機能的な児童の集団づくりができない。加配なしには習熟度別指導など、クラスの枠を越えた多様な指導形態がとりにくい。クラブ活動や部活動の種類が限定される。運動会・文化祭・遠足・修学旅行の集団活動・行事の教育効果が下がる。男女の偏りが生じやすい。生徒指導上課題のある子どもの問題行動にクラス全体が大きく影響を受ける等は本町においても当てはまると考えるところでございます。

また、教員数も少なくなる。このことにより、上記同様、学校運営上の課題は当てはまっている点も多く、経験年数、専門性、男女比等、バランスのとれた教職員配置や、それらを生かした指導の充実が困難になる。チームティーチング、グループ別指導、習熟度別指導、専科指導等、多様な指導方法をとることが困難になる。教職員一人当たりの校務負担や、行事にかかわる負担が重く、校内研修の時間が十分に確保できない等が挙げられたところでございます。

こうした学校運営上の課題が、児童・生徒に与える影響も考えられ、例えば、集団の中で自己主張をしたり、他者を尊重する経験を積みにくく、社会性やコミュニケーション能力が身につみにくい。児童・生徒の人間関係や、相互の評価が固定化しやすい。協働的な学びの実現が困難となる。児童相互のよい意味での切磋琢磨する機会が少なくなり、意欲や成長が引き出されにくい等が上げられたところでございます。現在勤務されている小学校の教諭に尋ねても、事務量が多いとの回答があります。

隣接型を含む一体型になりますと、今より教員もふえ、校務負担、事務分掌の軽減、

さらに先ほど述べました学級減による学校運営上の課題も解消され、児童・生徒と向き合う時間もふえると考えます。

しかしながら、隣接型を含む一体型になりますと、一般的に1学級の児童数がふえる。児童一人当たりの先生の数が少なくなり、きめ細かな指導が不十分になるという点も想定されます。

また、切磋琢磨できる環境。それは現在の社会において生き抜いていくためのもので、少人数の中で家庭のような環境でゆっくり育てるのがよいという意見もほかで出されていますが、児童にとって多様な人格との出会いと相互作用は、児童の人格形成に大きく貢献すると考えられるところです。

以上のことから、児童数関係の視点からの施設のあり方については、隣接型を含む一体型のほうが、今後予想される課題を克服でき、適正な規模となり、より望ましいといえる。ただ、きめ細かな指導ができる手だて等を考える必要があるとしたところがございます。

3番目に地域関係の視点からでございます。学校は児童・生徒が学ぶ学び舎であるだけでなく、災害時の避難場所や、地域行事の集まりの場、生涯学習の場等、地域コミュニティの核としての機能も有しております。現在それぞれの学校において、保護者や校区の地域の皆様、地域ぐるみで学校を支援していただいているとともに、地域においても居場所をつくるなど、地域と学校の結びつきが強く、地域ぐるみで子育てをしていただいております。その思いは、各学校への愛着となり、小学校では距離の近さもあり、多くの方々の協力が得られているということにもつながっております。

地域の学校への思いは、分離型、一体型、どちらの形態であっても地域を挙げて子どもたちを育てていただける環境にあると考えられます。

また、一体型の場合には、地域の人材の偏りが解消され、町全体となることから、広い地域からの人材が集まり集中することにより、質・量的にも高くなることを期待しているところでございます。

野球等の少年団は、以前は各小学校ごとのチームがありましたが、子どもの減少から宇治田原町で一つのチームとなっています。両小学校の子どもたちが一堂に会して、より参加しやすいような環境があれば、もっと少年スポーツ関係の活性につながるというような意見もあったところです。

一方、両小学校は143年の歴史があり、その中で地域または保護者の方々がそれぞれの学校を支え、つくってきていただいた歴史があります。一体型となれば、多くの卒

業された方々や地域の方々の母校がなくなることにより寂しさを感じるという地域の思いも出てくるものと思われます。校舎が遠のくことにより、遠距離通学者も生じ、通学手段や安全性の問題等が新たな課題となり、地域力が失われるのではないかという意見もあります。

以上の点から、地域関係の視点からの施設のあり方については、隣接型を含む一体型のほうでは、課題もありますが、新たな町外からの転入住民を含め、児童・生徒に直接かかわる授業への参加や、間接的に支援いただくことにおいて、質・量ともに高いものになることが期待できるという点で、宇治田原町全体としての連携をつくり上げることによって効果が上げられるものと考えられるとしたところでございます。

総合的な方向性ということで、教育委員会では、子どもの教育を行うためには、子どものためにはどの形態がよいのかを主眼に、教育的観点を踏まえ協議を行い、小中一貫教育関係の視点、児童数関係の視点、地域関係の視点のそれぞれのまとめから、将来の子どもたちにより望ましい教育環境をつくり、より高い教育効果を得るために、さらには小・中学校が核となって教育力のある地域をつくるため、小・中学校の施設を隣接型を含む一体型とするとの方向性を取りまとめたところです。

今後、このことにより学校適正規模を保ち、小中一貫教育を推進していく中で、地域が学校の課題と取り組みを理解して、学校と家庭を支援できる力量を持つ地域がつけられ、ふるさと宇治田原を愛し、未来にはばたく子どもたちの育成を目指してまいりたいと考えているところでございます。

以上でございます。

○西谷町長 ありがとうございます。

ただいま教育長のほうから報告説明等がございましたけれども。そういった中で、皆さん、何かございましたらよろしくお願ひしたいと思ひます。

○増田教育長 各委員の思いというのは、この中に書かれていますので、出てきた意見を合わせたものが、実はこの答申にまとめられていますので。教育委員会が、私どもの観点というのは、あくまでも教育委員会は子どもたちにとって、どういふ環境が一番よいのか。そのためにどうしたらいいのかという部分ということで考えてきたということで、どうしても地域の観念のほうになりますと、かかわりといひますと、まちづくり全体のかかわりがどうしても出てくるというのは強く感じておるところです。

○西谷町長 やっぱ一番気になる点が、そこにありますでしょうか。両小学校143年の歴史がござひます。私も宇治田原小学校の卒業生であり、また子どもも宇治田原小学

校を卒業させた保護者の一人でもあります。

そういった中で両小学校と地域力との関係性。それが今度、例えば、隣接一体型になるとどうなるかというところ辺がやっぱり気になるところでございます。

学社連携事業というんですか、地域の生活と家庭での事業がいろいろ取り組まれているところでございますけれども。平成14年に学校5日制になったときに、初めて本格的に学社連携事業という形で、この地域に関して、この地域で育もうという、文科省におきましては受け皿をつくらんままに休みにしてくれたなという、僕はこういう思いを持っている中で、教育長も一緒に、当時はやっていただきましたけれども。各区の区長さんのところをお願いに回って、これからこういうことをしていかなあかんねやと。それがやっぱり地域とのつながりによって、地域の子どもたちがいろんな体験をすることによって、人と交わることによって、心が育まれていくんやと、そういうふうな思いを持って、いろんなかかわりを子どもに持たすこと。これも大変に重要であろうと考えておるところでございます。

人と人の出会いとか、つながりとか、きずな、こういった地域という観点から一体型になったときに、それは実現可能などというところ辺をちょっと教えてもらいたいというふうに思います。

○増田教育長 教育委員会といたしましては、この方向性につきまして今後検討、4月以降の中で検討を、創生を進めていくということになりますので、その中で大きく二つの点を考えてございます。

一つは、コミュニティスクール等を含めた、その拠点となる小学校と、町内全ての、全体を網羅するようなつながりをつくる、そういう新たなシステムをどういう形で、宇治田原町らしい組織という、地域と学校とをつなぐ組織というのはどういう組織があるのか、いいのかというのを改めて検討してまいりたいというふうに考えているところです。

もう一つは、先ほど意見の中でも申し上げましたけれども。私も町長おっしゃっていただいたように、それこそ平成12年の時に、町長のほうはPTA会長をしていただいでいて、私も教務主任していて、ご一緒に、二人で、各区長さんのところを、自治会長さんをずっと回らせていただいて、地域を挙げての、子どもたちの地域の人とかかわりながら、各団体であったり、老人クラブ連合会であったり、地域の消防関係であったり、多くの方々とかかわりながら、地域の中での体験活動をお願いしたいということで回らせていただいた。

宇小校区のほうについては、各地区に学校のほうとPTAのほう各位お願いをさせていただいて、推進委員さんを地区ごとに設けていただいて、そして、事業として取り組みがなされたということを覚えています。

ですから、子どもの組織というのは、今も田原小学校区においても、地域の方々がPTAだったり、地域の方々が一生懸命、今も地域ぐるみでの子育てをしていく取り組みがなされている。だから、それは分離型であっても、一体型であっても、今後の中で、地域の中で子どもたちを支えていただける、本当に温かい基盤が宇治田原の部分についてはあると、私は理解、また考えているところです。

○西谷町長 ということは、ひとつ、隣接一体型になっても、そういうコミュニティスクール的な、全町全ての人がつながりを持っているような組織となる、そして、また今やられているのは地域との連携性、これは一体型でやっています。十分可能やというふうに理解させていただいてよろしいですかね。

○増田教育長 今議会等にも意見として求められていますのは、地域の中での寺子屋的な取り組みについて働きかけということで、子どもたちが地域の中で居場所をつくるべく状況にあるのではないかというご意見をいただいているところです。

銘城台でも、地域の卒業した子どもたちが本を全部会館のほうに持ち寄って、そして、土曜日の午後に老人クラブ連合会の方が交代しながら、自由に子どもたちおいでって、一緒に本を読んでいいよという。地域の子どもたちが集える場所もつくりたいという、そういうようなこともございますので、今後の取り組みの中で、そのようなまた働きかけのほうはしていけたらなというのは考えておるところでございます。

それは、やはり一体型、分離型ではなくて、地域の中に、どれだけ手厚く、子どもたちにかかわったのかということが、子どもたちがその地域に対する愛着につながっていくと私自身は感じておるところでございます。

○西谷町長 将来的に、やっぱり今少子化という形になってきている。そういった中で、一体型になったらある程度ボリュームがでる。そういう中で、いろいろと協議に関してはやりやすくなったということ。

その中で、例えば、子どもの人数が多くなると、子どもに対してのきめの細かさというのがどうなのかというところ辺はどうですかね。薄くなるとか。いや、多くなるとか。

○田中職務代理 その点だけと違って、全部関連していますね。学校統合の問題とか、全てですね。小中一貫教育で小・中を統合するというよりは、小学校と中学校でいったん分ける方がいいと思います。子どもたちがある学年で振り出しに戻れる、そういう区切

りがあった方がいい。だらだらと9年間が続くのではなく、その点で、みんなさらに返って、よし、今から新しいスタートやというふうに、ちょっと引け目を感じている子も出直しに行くんで、区切りが必要と思ってるんですけども。そういう観点でいうと、統合問題というのは、今まで議論したことがあります。その小学校を統合することによって一番の問題になるのは、よく言われているのは、子ども一人当たりの先生の数が少なくなるというのは、町としては、全体としては確かにあると。

例えば、今年の小学校1年生を見ますと、田原小学校が34人で、宇治田原小学が18名で、バランスとしては悪いですね。これがならされると、二十三、四でならされるのに、私なんかは、田原小学校の授業参観に行ったとき、ああ、これ大変などと思ったのが、一番、心に残っています。その方も気にしておられる印象をもっています。そのことから考えたら、局面的には児童数が減るような、学級で減るようなことも書いたんですが、基本としては、子ども一人当たりの先生の数が必ずふえる。これは減るといえるのではないんですね。4学級が3学級になるか、3学級は3学級のままで減ることがないんですね。ならされることはあっても。そうすると、その子供の数が増えた学級というのが、子どもたちの一人一人に目が届かない。その問題が一番なので、そこが反論として出てきて、一人一人目が届かないことへの方策としては、やはり少人数指導ができる体制が必要だということです。今まででも少人数指導でよく言われるのは、習熟度別クラス。そのために加配が要るんです。そういうふうに教育の現場で、少人数指導ができる体制をつくっていかないと、今の統合した場合の不利、デメリットはうまくいかないんじゃないかというふうに思っています。長くなりましたが、これで。

○西谷町長 宇治田原小18人、田原小34人。それを2クラスに分けて、2クラスにやります。先生の人数は減ることはないんですけども、その目を行き届くという中では、子どもの人数がふえるから細かい目の届かない可能性がある。そういう中で、例えば、そういうことを、2クラスあれば習熟度とかいう形をやりやすくなりますよね。そういった中で、ある程度の学力の習熟度の中でクラス分けして、それできめの細かい指導をして行くという部分では、クラス面ではよい。そのかわり加配の先生が要りますよというところからは出てくるかもしれないです。

○増田教育長 そうしましたら、あわせて教育委員会のほうで、今後考えられる教育事情というのを一つ入れさせていただいたところです。これについて、今のところで説明をさせていただきます。

一つ目は、施設・設備について。多方面からの情報収集による充実した新校舎の建設。

建設場所を含む。それから、施設を、2校を仮の一つにするわけですから、その施設設備自身もより充実したものに。施設面で充実をお願いしたい。

二つ目が、人的配置。これが先ほどの、今田中委員さんのおっしゃっていただいた部分につながっていくんですけども。町費の教員の配置の充実でございます。加配教員が多く来れば、それだけ子どもたちにきめ細かな形での手だてが打ちやすい。特に現状でも本町においては、他の市町に比類なき充実した配置をしていきます。

例えば、学力充実加配ということで、3校に2小学校のほうに配置していただいていますし、二人が配置していただいていますし、それから、英語のALTについても、3校でありながら2名の配置をいただいていると。それから、特別支援教育にかかわっての支援体制ということで、府のほうから一人と、それから町のほうから二人配置ということで、各校に1名ずつの配置をいただいている。それから、図書館にかかわるのは司書でございますけれども。3小・中学校に3名の配置をいただいているということで、これだけきちんと人的配置をしていただいている他の市町はないんですけれども。これが3校が、仮に小学校が二つが一つになったとしても、それが経済的な側面で減らすのではなくて、より子どもたちを育てるためにという、今までのことを貫いていただいて、ぜひとも学校数という形ではなくて、その大きな力を一つに集めて、より子どもたちに生かしていくという視点でぜひご検討いただけたらうれしく思うということです。

それから、安全な通学手段の確保。特に、既にこれからでもそうですけれども。地区のそれぞれの人数が減ってきている中で安全確保は大変厳しい。安心・安全についても、各地域の中で、多くの地域の方々が安心・安全パトロール隊にご登録いただいて、きめ細かく、毎日子どもたちに付き添っていただいて感謝申し上げているんですけれども。それがより広範囲になりますので、その点でいうと、通学バス等の充実した運営をぜひお願いしたい。

それから、まちづくりとのかかわりの中で、他の教育施設、今現在では、ちょうどこの地区が中学校と、それから体育館、生涯スポーツ関係の拠点となる住民体育館あるわけですけれども。それから、住民グラウンドもあります。それから、図書館から、生涯学習の拠点となっている文化センターもあるんですけれども。今教育相談的な役割も果たしていただいている。そういう点でいうと、新たな教育ゾーンとしての検討もお願いできたらうれしく思っています。

それから、幼児教育、とりわけ保育所等を含めた関連の整備。それから、旧校舎の跡地利用等含めて、まちづくりの視点から、さらにご検討を賜ればうれしく思うというこ

とです。

それから、先ほどきめ細かなという点で言いましたが、指導が行われるかどうかという点で言いましたら、先のほうで出させていただいたとおり、教師の数が減って、そういうふうになると、これからもどんどん減ってきます。両小学校の部分でいうと減ってくる中で、個々の教師にかかる負担が大きくなっているということ。

それから、もう一つは、両小学校は一つにすることによって、人数の平準化はできるという捉え方をしているところでございます。

先ほどの田原小学校の1年生、それから宇治田原小学校の1年生もあるんですけども。今出てきている問題でいいますと、同じことが、人数の平準化ができていこうという捉え方をしております。以上です。

○西谷町長 例えば、学校の数が減ったから、町費で賄っている教員の人数配置は、学校の数ではなく維持すべきやと。

○増田教育長 手厚く、ぜひお願いしたいということですよ。

○西谷町長 幼児教育についてというところ辺がもう一つわからなかったんですけども。

○増田教育長 それは、するかしないかという意味ではなくて、それこそ町長が視察に行かれた施設一体型もあると思うんですけども。そういう中で、町を挙げて幼児教育も含めて検討されているところもあるやに聞いておりますので。ただ、そういうのを総合的にするかしないではなくて、検討していくこともゾーンの中に位置づけた形で出てくることも考えるのではないかと、これは投げかけという形でのご理解を賜ればうれしく思います。

○西谷町長 私自身は町長という職の立場でございまして、教育側をまとめる、まちづくりというふうには物凄い重みあると思うんですけども。立派な人間をつくるのがまちづくりにつながっていくというのは間違いないと僕は信じておるところでございまして。

そういった中でよりよい学校をつくることにより、よりよい町になっていくと。

例えば、行きたくなる学校という。行きたくなる、親御さんにすれば、通わせたい学校という部分ですね。そういった中で、例えば、教育に関しても学力ばかりじゃなくて、やはり地域とのつながりもしっかりする中で、総合的にかちつとした小・中学校の一貫をつくっていく。そういった中で、あそこに行かしたいから本町に住んでいただけると。そういうつながっていくような学校であってほしいなというのを思うところでございますけれども。

やはり、そういう学校づくりをしようと思えば、やはり今の現状、二つに分かれてい

るよりは、小中の隣接一体型のほうが、そういう学校自身、9年間という意味では、そういう学校をつくりやすい、そういう町にしやすいというふうに、教育の現場からはそういうふうには考えられますか。

○増田教育長 今のご指摘のとおり、まちづくりとすると、創生総合戦略の中で、平成52年、2040年に人口1万人という、本町では目標を立てているところでございますので、教育の部分として、教育として何ができるのかと考えたときに、今の現状のところではかなり難しいのではないかと捉え方をしているわけです。

そういう面でいうと、隣接型を含めた一体型の学校をつくっていくことによって、子ども、保護者にも満足していただける。その魅力ある学校をつくることによって、もう一つ思っているのは、一番多かったとき子どもたちが、宇治田原に残っていただけるような、ここの教育はええでと言ってもらえるような学校教育にしていくことが必要だろうと。そのことが町外から転居しても学校に通わせたいと思える学校にしていきたいというふうには思っているところです。やっぱり多くの方が町外から呼び込めるだろうという可能性が高いと考えているところです。

○田中職務代理 今町長のおっしゃられた内容と全く同じことなんですけれども。これまで小中一貫教育と、三本の柱で山手線、新庁舎というふうに大きな財政の話が出てましたが、また議会でも財政規律ということもちらっと出てたりもしています。そういう中で、本当に好きやねん宇治田原と言えるような学校にしようと思ったら、相当な覚悟、腹をくくっていかないと。そこの施設設備充実よりも、今後何年かしたら、情報教育とか、国際化とか、これからの社会に対応した地域分散型の学校など、かなり思い切った改革をしていかないと、いい学校やな、行かせたいなと思われぬ。その辺について、そういうところになると、宇治田原町が今地域にございますが、分散型で盛り上げるのか。一極集中型にするかというまちづくりの根幹にかかわってくる。それこそまちづくりは中長期の視点ですが、私たちは教育の関係で、今のところ、子どもたちにとっては、私は両小学校が統合するのが、子どもがいろんな体験をすることができますので、よいと協議している。

例えば、小中一体型やから、運動場や体育館は小学校と中学校が共同で使うような、そういう考え方と別々に使う考え方とでは、たちまち変わる。本当にしっかりした計画が、私は必要だと思います。

○西谷町長 この三本柱、三つ目の中には、そういうものも入ってまして、大きなものは山手新路線ですけれども。定住・移住対策の中では、そういった支援等も、やはりそ

ういう部分では、教育というのは大変まちづくりにとってはかなり重要な部分。

そういった中で、そういう部分は物凄く大切やという中で、やはりこれはこれ、これはこれというわけにはなかなかいかなくて、全てがつながっていく。そういう中でまちづくりができていくんやと、僕はやっぱり思っております。

そういった中で、やはり誰もがうらやむような学校という部分がね。一つの定住、移住対策にもなるし、そういった中で町の活性化にもつながっていく。こういう人材育成の中で、将来うちの町にすごいことをやってくれる人もできるかもしれないという中では、やっぱり充実してもらおうのが一番重要だろうというふうには思っております。

この山手新庁舎は、今現在ですけれども、子どもの教育というのはやっぱり未来に物凄く重要だというふうには思っております。決して教育現場だけ、まちづくりだけじゃなくて、これは相互につながっている部分だというふうに私は思います。

いろいろとご意見等ございましたらお願いしたい。

○山本委員 一言では申せないかもしれませんが。小・中学校での学校施設が一体型になりますと、やはり9年間一貫性のある教育生活を含めた学校運営が効率的に可能になるというのが一番ポイントかなと思います。

一方、やはり生徒たちは9年間同じ場所で同じ施設で学習し生活するわけですから、やはり児童・生徒の発達段階における配慮というものが必要になってくると。

その中で、私は考えていることがございまして、まず一つ目は、安全性。体力格差を考慮した施設ということになると思うんです。これは、やはり低学年児童が安心して遊び、学習できる教室というんかな。そこに隣接するような遊具があったり、伸び伸びとした学び場があると。それは周りを、このように自然環境に恵まれていますからたくさんあるんですけども。やはり、時には地域の人との交流も持ちたいという。社会人との交流もしないと。そうなりますと、かなり我々教育的な観点じゃなしに、やっぱりまちづくりのトータルの考えのもとに学校があるべきかなと思っている次第です。

その意味では、もう一つ深くいいますと、やはり地域の方との交流。高齢者や介護施設などの隣接と。これによって、やはり社会人さんとの交流が図れますし、また地域利用というか、多目的な空間、スペースのことも考えないといけないということはもちろんです。また別個に、やっぱり、今田中先生が言われましたように、6年間と3年間、あるいはまた4年間と5年間という形で、学年段階の区切りというものが非常に今考えるべき時期かなと思いますと、やはりその空間構成とか、やはり生徒たちの発達段階、成長段階において、ものの考え方も問い詰めていかないといけない。

ただ、このようにいろんな多方面のことを考えないといけないのが今回の会議だと思っているんです。ですから、町長さんを初め、やっぱりその地域の方々とコミュニティをとる。その中の核が学校であってほしいなと思うんで、ぜひトータルケアをしながら、学校を育てて、子どもたちを見守るような環境づくりを考えていただきたいなと思います。

○西谷町長 その考え方一緒です。

4年間5年間にするのがいいか、6年間3年間にするのがいいのか。その辺はある程度どちらがいいのかというのは考えなければ、今6年間で当たり前の小学校と、当たり前の中学校が3年間ある、それをいろいろ今見直されているところであります。やっぱり、何が子どもにとって一番いいのか。これを考えていくべき。

例えば、中学生が小学生を見るという、そういう部分でも思うんですけども。中学生が小学生のところに行ったり、いろんな発表したりというのはやっていただいている。そういったときの中学生の気持ちというのは、やはり小学生って自分より下の子どもたちが見ているというのは、これはやっぱりその子どもら自身はやはり模範にならなあかん。規律規範の問題ですけども。やっぱりそういうのは物凄い、今こういう形でいろいろところでやってもらっていますけれども。そういう中では、中学生の態度は物凄くないなという。目で見て感じられるというふうには思います。

例えば、中学校の卒業式、こないだも寄せてもらった中でも、長年行ってますので、子どもの関係も行ったり、それ以外で、PTAなど、長年もう中学校は卒業式には寄せていただいておりますけれども。こないだの卒業式なんかは、特に、本当に厳正さを、在校生の子どもらの態度もちよろちよろ見てましたけれども。みんな、きちっとしてたんだ。これはやっぱりそういうふうな経験のあらわれが出てきてるのかなという感じを受けました。やっぱりそれを見ている低学年の子どもは、やっぱりイメージ的に高学年になったときにはこうあるべきやと。そういうなんをずっと引き継いでいかれるのかなと。そのような気は物凄いですね。

いろいろと教育長は、いろんな小中一貫についていろいろと京都府外、学校をいろいろ見てこられたみたいですけども。やはり、このほうがええというのを物凄い感じられるんですか。

○増田教育長 施設一体型の学校がすばらしいというのは感じています。それから一番大きい理由は何かと言いますと、中学生の子どもたちがやさしくなるということ。さっき町長がおっしゃっていただきましたように、小学校では、例えば、6年生の子どもが

1年生にかかわって。ペアの学年。5年生は2年生とペアを組んでという。それは対象が意識するので、自分がお兄さん、お姉さんとしての役割を果たさないといけないという意識がありますので、同じように、それが一体型の学校においては、中学生、今は読書関係で中学校の子どもたちが両小学校の1年生に行って、また一緒に遊んだりするのに。保育所、幼稚園にも出向いてやっている。その時の子どもたちの表情というのが、本当に豊かな表情があります。それは全国的な事例も直接お聞きしましたし、集計の部分のところでも、中学生がやさしくなる。それから規範意識の定着が進むということです。

私自身が実は考えていますのは、教師にとっても、私自身ももともと今まで一体校の勤務がありませんので、中学校の授業がどういう形で行われているのかというのはやっぱりわからなかったです。だから、自分が校長の時には、中学校の授業参観は可能な限り見に行かせていただきました。そういう中で、子どもたちの授業に参加している様子とか見させてもろたんですけれども。今は、町外の小中一貫教育の取り組みを進める中で、年6回にわたっての研修をして、授業研究のほうもしていますし、中学校の教師が小学校に行く。小学校の教師は中学校へ見に行くというような形で、また教科部会で教科ごとの授業であったり、研究であったりを組んですることによって、教職員自身の指導力の向上に僕はつながると思っています。

教育は人なりとよく言われますけれども。やっぱり子どもたちにとっても、それは返されてくる。教師自身が伸びていく中で、子どもたちにも返されていくと思っています。

また、ちょっと長くなって申しわけないことなんですけれども。先ほど地域のかかわりという点でいいますと、本町、年6回の教職員の研修があると言いましたけれども。夏、今年の場合でしたら、教職員は風であってはならないという。子どもたちや保護者が地域の主導をとっていく。通り過ぎる人だけの意識の教職員であってはならないという認識のもとで、今年は今町内の3小・中学校の教職員が二つの研修。一つは、本町特産の一つであるシイタケで、中辻政隆さんのところのシイタケのところを見させていただいて、全員が研修を受ける。説明も全員が聞く。子どもたちがどういう地域で育ってきているかを知るといふ。また、お茶塾の谷口さんなんかのご指導いただいて、全員が茶かぶき体験をするという。やっぱり地域とのかかわりを密接に持ちながら、教職員自身も研修を深めていくことがあるということです。

最後に、先ほどのコミュニティスクールについて申し上げましたけれども。地域とのつながりという意味で検討組織をつくることとあわせて、学校教育制度が変わりました。

そういう中で、義務教育学校とするのか、小中一貫型の小・中学校とするのか。はたまた、学校名と学校全体の部分を一つにする。または、小学校、中学校を別にする。それから、学年の区切りをどこで設けてくる。ブロックの区切りをどこで設けてくるということについては、4月以降の中で教育委員会として検討を進めていきたいと思います。課題を整理されているところでございます。

○田中職務代理 以前、私も教職についていましたが、結構大変やったときが思い出しますが、一つの原因は子どもたちの数が減っているからということがないのかな。それでいうと、あわせると、結構いろんな子が集まってくるということがあり得るなというふうに考えますね。先ほどの保護者の意見。その時の考え方で、その子にとってみたら、いろんな子どもがいるところで学習するということが、実は私は大切だと。だから、何もないから、みんな静かにやっているから、非常にいい学校でいい子どもらに育ったと思うのか。ちょっと大変やったけれども、非常に子どもたちが切磋琢磨して、よくまとめてきたととるのかね。私なんかはどっちいうと、静かに粛々とやっているだけでいいというには思わないんです。だから、大変なことはあるのですが、次からの非常にいい見識のある子どもたちになるのかなというようなことで、そういう期待だけでみると、私は切磋琢磨して鍛えられるということが、子どもにとって大切ではないかと思います。

○西谷町長 多くの人数で、クラスメイトだけで、多くの高学年なり、低学年と接することによるほうが、いろんな大変なことがあるでしょうけれども。そういう中で育っていくほうが、子どもにとってはいいという、そういう事。

○田中職務代理 特に3、4年からの2年間というのは、人間関係をつくるのにね。1、2年は主に親・先生から何をするかということ学ぶのですが、自分たちで何かをする自己が、自我が出てくる。9歳ぐらいにおける色々な人、仲間との出会い、大切なんです。私たち大人が、ただおとなしい静かにやっているだけでいいというだけでいけないんじゃないかと思います。そういう大人しくやっているだけの子が良いという評価だけで捉えていくと、早とちりする可能性もあるなというふうに思いました。

以前の非常に小さな学校で、10人ぐらいしかいないような、20人ぐらいの学校やったら、そんな荒れようもないし。粛々といい卒業式でした。ただ、それがいいというか、何をいいというかというのがあります。

○西谷町長 次に杉野委員どうでしょうか。保護者の立場でもあります。どういうふうに思っておられるのか。いろいろとこの中に意見を集約していただいているとは思いません。

○杉野委員 そのとおりで、教育委員会として話し合ってきた内容で全てまとまっているので、改めて申し上げることはないのですが、ただ教育について町長の考えられるまちづくりの中での教育施設のあり方とはどのようなものか伺いたかった。よりよい学校をつくることによって、よい人材が育成できる。子どもが行きたくなる学校、親が行かせたくなる学校ということを考えておられるんですね。学校教育の充実が宇治田原町の未来へつながる。前向きに考えていただいているのではないかなと、私としては安心するところです。

○西谷町長 本当にいつも申し上げますけれども、子どもは町の宝、その宝をいかに磨いて育てられるかという。やっぱり教育は未来につながっているのかなと。その中で、やっぱり施設の充実。一つになったから全てがええもんじゃないかもしれませんが。そういう中で、私もずっとやってきた地域ぐるみによって、学校を支える。やっぱりそういう部分は、さらに大事になってくる。

○山本委員 わかりにくいかもしれないんですけども。学力の向上と生きる力は大切であると、これから子ども達は人間関係でもまれ、さらにストレスのかかる社会で生きていく。そのためには、一体的な組織体制のもとで、総合学習にいかにして取り組むかというのが大切ではないかと。その中で、宇治田原は総合学習をして、地域を学ぶ、それをいかにして、これからのまちづくりと教育を一体的に考えることによって、今ある宇治田原の環境、緑豊かな自然、優秀な人材が豊富で、地域性を重視した取り組み、そういうようなものができるところやと思いますし、また、これからは自治体の判断で膠着的な状況というものを少し風穴が明けられるような事を文科省も言っているんじゃないかと思います。

そして、まとめますと、やはり教育が十分に受けられる環境の中で、遊びながら自然を知って、ものづくりや体力づくり、あるいはまた基礎教育力を養う。宇治田原にとって非常に大切な施策がふえてくるのかなと思います。

ぜひ、一体的な教育環境をつくっていただきまして、まちづくりに生かしていただきたらと思います。

○西谷町長 人材が、両小学校が一つになれば人材が集まる。そういった中で資質、また学力的にも高くなっていく部分のことも言える。大変いろいろとこれからも協議をする事が出てくるだろうと。先ほど教育長もおっしゃった課題というものもあるとは思いますが。その中で議論いただいた小中一貫の考え方で隣接型か一体型かまでは別として、小中一貫を進めなければと。そしてやっぱりまちづくりという観点からも親御さん

が行かせたい、子どもにとっても行きたい学校。やっぱりそういう部分も考えるべきやと。地域間競争で町の地方創生でやっておられる中で人口は減少し続けている中で、昔はもう少し全体の人口をどうして増やすんやというところ辺が僕らは一番肝心だったと思うんやけれども。今は自治体、自治体で取り組んでいって、人口減少に歯止めをかけよう。そういう今、皆さんがそれぞれの市町で取り組みをされているんですけども。子どもという部分を考えたときに、そういうことばかりじゃなくて、やはり子どもの人生をどういうふうに、今我々いる人間が支えて大人にしていくかということをやっぴり一番に考えていきたいというように思いますし、そのことが、例えば、町に好感を持たれて、自然に住んでみたいという、そっちの方へもつながっていく、優先すべきの中で、後からついてくるのかなと。人口減の歯止めをかけても人口がふえるという部分で、その辺も可能かという気がします。

他、ないですかね。

施設に関しては、やはりこういう形で進めていくべきだろうかという部分だろうと思います。そういった中で、もう少し具体的な部分なり、例えば、スケジュールなりというところを推進していかないといけない。そういった中で、やはり保護者にも図っていかなければならない。

私、新潟に行ったときの学校は、保育園、認定こども園、小学校1年から9年生、それが一体になりました。職員室は大きな職員室でございましたけれども。小学校の先生も、中学校の先生も同じ職員室におられました。その中でいろいろ協議をされてて、小学校は小学校の先生の立場があろうかと思えますけれども。そういった中で、いろんなことを話し合いをされてしておられましたし、その両サイドに小学校の校長先生の部屋と、中学校の校長先生の部屋があったと。まだ開校されて1年たつたないかというところでもございました。同じ敷地内に保育所なり、学校、認定こども園があって、ほんまにちっちゃい子までそこらにいるんですけども。そういった中で、子どもたちがいましたという光景でしたけれども。まだ、その結果というのは、まだ開校されてそんなにたつてないんで、どういうふうな成果があるというのは申し上げられないということはおっしゃってましたけれども。かなり、物凄い小学校と中学校の連携じゃないですけども、連携というふうな言い方じゃなくって、一緒になってやっていた。

○田中職務代理 一応一体型の方向でという方向性がここでは、そういう認識で、私もそういう認識と。地域の方が、やはりこの際だからコミュニティスクールのように、住民が参画してやるように、思い切って変えたらどうかと。教育の形としては、地域の方の

声を十分に入れて進めていくということが必要かなと。私たち教員で、教育面ですぐ子どもたちがどうだと考えますが、保護者の方や思い切った発想を求められる方もいる、そういう保護者にでも、やはり素直に聞いて、受け入れられる、やっぱり柔らかさを持った方向性であってほしい。あとは時期であって、議会でやっていただきたいと思うんですけれども。という段階ですが、ぜひとも町民の皆さんの声を十分に入れて、柔らかい進め方をお願いしたい。

○増田教育長 今、話がありました、周知の方法ということで、教育委員会のほうといたしましては、まずはもう4年にわたってずっと議論して、結論どうやったんやろうという経緯がありますので、こういう方向性で結論出しましたよということで、まずはホームページ等でそういうことをしたりしながら、途中経過等も報告していくような形。ただ、こういうふうにしていくような形で今考えておるといことです。

全体討議に細かいことをお聞きになられても実際に答えられませんので、それはどこにつくるの、いつつくるのという、今後の長いスパンの中で検討を進めていかざるを得ないもの、先ほどの地域との連携、組織もそうです。学校教育制度もそうですし、かわることもそうですし、そのあたりのところを協議を進めつつ、まずは方向性をお伝えをさせていただこうかなと考えております。

○西谷町長 この小中一貫自身のお話が出たいつだったか。

○増田教育長 答申に書いたのが25年の2月ですね。

○西谷町長 それまでからずっと議論されている。やはり、そういう部分ではやっぱりこういう形で進めるのであれば、着々と進めるべき、着々とはいかないんですけれども。前向きに教育委員会のみならず町長部局との連携で進めていく。僕らもやっぱり教育の現場に政治はどうかと気になる、その辺で確かにあります。そういった中でもよりよい学校づくりのために教育委員会とも連携を図る中で、取り組んでいきたい。

そうしましたら、方向性は一体型ということで。今日いろいろとご意見聞かせていただきましたし、私の思いも聞いていただいたところでございます。そういった中で教育観点からの施設のあり方、またまちづくりの観点からのあり方、いろいろと議論が出て、そういった中で方向性を見出すということでございますけれども。まだまだ精査していかなければならないだろうというふうに思いますけれども。今後も教育委員会とも連携を図りながら、課題の整理を行う中で、町としてもしっかりと方向性を見出してまいりたいというふうに思います。その辺で今日は終わりたいと思いますけれども、よろしゅうございますか。それでは、ありがとうございました。